

野村傳四

神泉

神

泉

明治三十八年の夏を境にして「神泉」と云う雑誌が出た。編輯者は小澤平吾と云った。私はその姓名など久しく失念して居たのであるが、偶大正八年版の「漱石全集」第十二巻の「書簡集」を披いて見ると、その三〇四ページ、先生から中川芳太郎氏向けの手紙中に、「神泉という雑誌の小澤平吾と云う先生が来て月見に来いと云うたが是は御免蒙る」と云う一節を披見して、それとわかった。私は先生の千駄木の御宅で面会して、先生から紹介

された。初対面の印象と云えば、小澤氏は失礼だが、至って野暮臭い。何でもヘイヘイと云ってばかりいて、夜の明けぬ人物の様であった。当時浅草近辺に家を持って居た様に記憶する。で先生を月見に誘ったのも隅田川の月でも案内しようとする腹だったかも知れぬ。当時三十五六歳、背広服で座布団の上に畏まって居て、碌に口もきけぬ様であった。その時の話では雑誌を出すから応援して呉れと云う依頼に推参したのである。それでは出版の経験があるかと云えば左様でもない。先生と前からの知り合いかと云えば左様でもない。又は誰か先生の知人

が紹介したのかと云うに左様でもない。そんな訳で先生も宜い加減にあしらって居らしった。又傍觀者たる私から見ても、文学青年とも見え、物持ちらしくもない、この小澤氏が雑誌を出すと云うのも滑稽的に感じたものだ。大方誰かが今雑誌を出して先生の作を載せたら儲かるぞと云うのを聞きかじって、頼みに来たと思えな。い。只本人は至極真面目で、芝居に案内したり、月見に誘ったりしたと見える。而して月見は辞退されたるうが、芝居見物には応諾された。この芝居見物が何度あったか、知らぬが、精々二度を超えぬだろうと思ふ。と云うのは、

この雑誌が半年は愚か二三号出したばかりで廃刊したからである。事実「書簡集」に依って、「神泉」関係の手紙を拾って見ると、最初に小生向け、八月四日、「神泉は出ない方がいい。僕の筆記杯は何かかいてあるか分らない」と云うのがあり、次に八月六日、小生向け「神泉は出た巻末の本郷座の合評は当時愚なものだと思つたら中々君面白いぜ」とあり、続いて、既に申した、八月十日、中川氏向けのとなり、それから、八月十九日、高田知一郎氏向け「其内に神泉に出た君の春の夜という新体詩の批評がまぐれ込んで居るが云々」となり、最後に

九月五日、野間真綱氏向け「神泉はえらいものだ。梨雨先生（高田知一郎氏の雅名）のダンテはうまい。」とあって、其後之に関する消息が絶えて居るのである。つまり先生は小澤氏に対して同情もなく、敬意も払わず、成る様になれと云う態度で、其心持は「神泉は出ない方がいい」で尽されて居ると思う。

私はこの一度か二度かの芝居見物に御供をした記憶がある。場所は、本郷座、出し物も俳優も記憶がない。一所に行ったのは、先生に私、それと当時熊本五高の教授であって、夏休に上京して居た、独逸語学者の三浦吉兵

衛氏とであつた。三浦氏は別に先生の旧知とも承知せぬが、上京の序に、当時の洛陽の紙価を高からしめて居た、先生を訪問されて、同行者となつた事と察する。例の小澤氏は同じ榭ではなかつたが、芝居の中途に一度挨拶に来て又去つた。

私はこの時の芝居の記憶は少しもない。或は「神泉」の合評にある金色夜叉であつたかも知れぬ。若しそれなら合評会に出て居相なものだが、私はそれに出席したとも覚えぬ。只合評会のあつた事はたしかで、同誌創刊号の合評の中□印は明瞭に先生である。但しその外×○△

印の誰であつたか、全然見当がつかぬ。

只この芝居の事で明瞭なのは、幕間いの雑談に斯かるだらだらした芝居などやるより、極めて簡単明瞭に、然も余情のある、所謂俳句趣味の横溢したのは如何だろうと云う話があり、恰も高濱さんに「行水の女にほれる鳥かな」と云う句の発表された直後だったので、この句が引き合いに出され、丁度「猫」の中に面白く描出されて居る俳劇にある様な話をして笑い興じたと云う事実であるが、先生はこの時の談話にヒントを得て、後に「猫」に於て滑稽化されたのであつた。

「榊泉」の事は以上で尽きるが、私は他に今一度先生と芝居を見物した事がある。それは矢張り明治三十八年の頃、一日奥さんに逢ったら、この頃先生の御機嫌が悪いから、何処か芝居にでも案内して呉れんかと云う依頼見た様な事があつた。私は早速之に応諾した。これを語るには先ず私と小山内薫氏との交情を述べねばならぬ。小山内氏は当時小石川の奥宮下町に家を持って居て、劇方面に活動して居たが、まだ学生中でありながら、授業には殆んど出席せず、所々飛び廻つて居た。左様なると同氏の困るのは、学期末に於ける独逸語の試験であつた。

そこで同級のよしみとして、試験前になると、私は大学附近から小石川の奥迄、その出教授に出かけたのである。而して朝早々出かけて昼飯の御馳走位になって帰宿する様な事が度々あった。そこで小山内君はその御礼心に、私を氏の関係する芝居を見に案内して呉れたが、その頃伊井一座は中洲の真砂座に拠って、帝都の新派劇を二分した形であった。一座の俳優は大将の伊井蓉峯以外に、木下吉之助、福島清、藤井六輔、大谷馬十、深澤恒造、井上正夫など云う面々が居た。而して小山内氏が、その舞台監督になって居た。当時矢張り同氏の監督で「非戦

闘員」と云うのがある。と云うので、私は例の通り同氏の御供をして、その初日を見せて貰い、頗る気に入っている。だから、直ちに小山内君に依頼して、先生を案内する事になった。所が一度日迄定って居たのに、先生の御都合で中止された。それは「書簡集」に同年十一月十三日、私向けに「君の尽力に因って真砂座を見る筈の処少しく都合が出来て同行が出来ぬから一人で行ってくれ玉え」とあるので分る。而して二度目に御供して行った。この時玄関で案内を請うと、やがて先生について奥様も筆子さんも出て御出でになり、筆子さんは、私に「お父さん

はね、学校に行くの、いやだいやだっておっしやるのよ」と語られた詞が今も耳底をはなれずに居る。さてその時は別に芝居に対する悪評もなく、奥様の寄託に背かなくなかった次第だ。その折千駄木から本郷三丁目迄歩いて、そこから電車で人形町迄行きその先き何町かを歩いて行ったのだが、今なら自動車で、御宅から出て小屋の前迄、三十分で行けようが、当時は御宅から、電車に乗る迄も優に三十分はかかった様な気がする。その三十分もの道を、夜陰にとぼとぼ歩いて、二人は帰るのであった。

日本文学電子図書館

神 泉

著 者：野村傅四

制作者：宮澤一郎

底 本：漱石全集(昭和49年版) 附録
岩波書店

昭和50年3月10日 発行

日本文学電子図書館